



金山水車跡関連年表	
西暦(年号)	できごと
1890(明治23年)	金鉱脈の露頭が発見され、赤石鉱山の探鉱が始まる。
1902(明治35年)	大日本帝国陸軍測量部による地図に水車記号が描かれている。
1904(明治37年)	銀の製錬所として認可される。
1912(明治45年)	金・銀の製錬所として認可される。当初の名称「赤石岡鉱山」から「赤石鉱山」と改称し、本格的な採掘が始まる。
1921(大正10年)	轟製錬所の下流に発電所を建設し、製錬所と赤石鉱山への送電が始まる。
1935(昭和10年)	轟製錬所が廃止される。

※ミュージアム知覧に寄託された金山関係資料及び『赤石鉱山の概要』（三井串木野鉱山株式会社）を参考に作成しました。

金山水車跡について

金山水車跡は、明治末期から昭和初期にかけて操業していた製錬所の跡です。ここでは、直線距離で約8km離れている赤石(あけし)鉱山から、荷馬車で運んだ鉱石を水車の動力を利用して細かく砕き、金や銀を取り出す作業(製錬)を行っていました。

当時の技術者たちが、水量豊かな麓川や加工しやすい岩盤等、水車利用に適した自然地形に着目し、この場所を選んだと考えられます。岩盤を人力で数mの深さまで掘削した水車坑や排水溝は、当時の技術の高さを物語っています。

細かく砕いた鉱石は、水と混ぜて沈殿させると比重の重い金などは底に沈みます。それを取り出して水銀を混ぜて溶かし、坩堝(るつぼ)と呼ばれる容器で高温で熱すると、水銀が蒸発して金を取り出すことができます。このような製錬方法は、奈良の大仏を造る際にも使われました。

古来からの伝統技術である石材加工と水車動力を工夫・活用した金山水車跡等の施設群は、近代の貴重な産業遺産といえます。

【参考文献】石川 哲 1990『山ヶ野金山のすべて』高城書房
浦島幸世 1993『金山』春苑堂出版



溪谷に響いた、近代化の水音

平成26年11月22日(土)

午前 10:30 ~ 12:00

午後 13:30 ~ 15:00 (小雨決行)

当時の宮内鉱山轟製錬所

セピアに色あせた1枚の写真。「ある日の製錬所」のひとコマです。橋上の人物は、初代の所長さん。背後の建物の入り口にも誰かいますね。左側には水車が少し見えています。ここでは水車の力で金鉱石を砕いていました。右隣の茅葺き屋根の下には、今回の調査で明らかになった水車がありました。さらに後には、多くの人々がカメラの方向を見えています。その前をトロロコを押して横切ろうとする二人の女性の姿が…。当時の職工さんたちの声が、今にも聞こえてくるようです。

(写真提供 南九州市教育委員会)

発掘調査現場説明会

金山水車跡

(宮内鉱山轟製錬所跡)



鹿児島県立埋蔵文化財センター



TEL(代表) 0995-48-5811

ホームページ <http://www.jomon-no-mori.jp/>

